

学 位 論 文 要 旨

氏 名 千 種 彰 典

題 目 言語を活性化して意味を探求する国語科授業の研究
—小学校文学教材を通して—

本研究の目的は、国語科の文学作品を対象とする読解「探求」プロセスの全体構造を明らかにすることである。そのために、言語の活性化、主体的な問題意識、問題解決による解釈生成が重要になると考えた。一般的に文学教材の読解における問題点は、学習者が主体的な問題意識を持ってないこと、解釈の多様性が対話によって吟味されないこと、一人一人の読解が深まらないことである。

文学教材における読解授業の到達点は、核心的なものを求めて、納得のいく一義的な解釈を「探求」することではないだろうか。言語を活性化して、見方・考え方の変革をもたらす読解「探求」は、現代の複雑な問題を解決する基礎学力の中核になると考えた。

研究方法においては、具体的な読解授業の分析を基に、文学教材における読解「探求」の形成原理とその要素を抽出し、量的・質的アプローチの統合的方法によって複雑な読解「探求」プロセスの内実を解明する。

第1章では、「探求する授業」における学習者の問題意識に焦点をあてた。「探求する授業」では内容に迫る意味ある問いを設定することが重要である。その核となる考え方が、「真の問答」（古田 弘）、「真理を追求する授業」（斎藤喜博）、「意味の核心に迫る探求共同体」（リップマン）である。「探求共同体」では、〈言葉の奥にある真実の「探求」〉、〈「探求」における問いの重要性〉、〈「探求」プロセスにおける議論の重要性〉を重要な形成原理として設定した。その上で一人一人の「探求」プロセスを重視するという観点から、「言語の感覚・論理による探求」、「問いによる探求」、「議論によって解決する探求」という側面に注目した。真実に迫る教師の方向づけを前提としつつも、学習者自ら言葉の奥にある新しいものを発見し、深い解釈に到達することが必要である。

第2章において、読解「探求」における形成原理（言語の「自覚性」、「問題性」、「解決性」）を示し、それぞれの要素をあげて読解「探求」の考察を行った。

言語の「自覚性」の検討では、「概念発達」と「異化」作用をとり上げた。1つ目の「概念発達」の観点から見ると、言葉の意味を自覚する読解「探求」が必要である。言葉の意味を捉え直し、新たな言葉の見方を獲得することによって、自らの言語は活性化し、その「自覚性」は高まる。2つ目の「異化」作用の観点から見ると、「異化」された言葉への注視が、読解「探求」の入り口であり、言語の「自覚性」は「探求」プロセスを貫く要点である。「異化」作用によって、言葉は本来の鋭い働きをとりもどし、的確な意味を示し、事実を明らかにして真実の通路をひらく。「探求」する授業の「問題性」では、「矛盾」の視点による解釈が、問題を明確にして、問題を解決する「探求」プロセスの拠点になることを述べ、「探求」する授業の「解決性」では、捉えた言葉の意味から「矛盾」を発見し整理し直して、言葉の繋がりを従前のも

のと変える読解プロセスが重要であることを論じた。

第3章では、主体的な態度で解釈を深めている「探求」授業を分析して、読解「探求」プロセスの全体的構造を明らかにした。分析の対象となる授業は、主体的な学習によって読解を「探求」している片山実践である。多様な授業分析の中で、この実践は、学習者自らの問題発見力、言葉の意味の「探求」力、新しい解釈の創造力において優れていることが明らかになった。読解「探求」解明の方法として、「トランザクション対話」分析（TD分析：量的アプローチ）と、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」（M-GTA：質的アプローチ）とによる統合的な分析を行った。具体的には、まず、TD分析によって得られたエビデンスによって、片山実践の読解「探求」の実証性を明示した。次に、M-GTA分析によって、片山実践（同学級）の「探求」開始期（4年4月）から充実期（4年終わり）の「探求」プロセスの意味を明らかにした。これら量的・質的アプローチによる統合的分析で得られたことは、以下の3点である。1. 「問題の自覚」では違和感のある言葉・異質な考えから重要な問題が生成できること、2. 「問題解決」では、対立した解釈による継続的な事実解明は、言葉の発見・読みの発見をもたらすこと、3. 「自己探求」では、直観的・主観的な考えの論理的検証（読解「探求」）によって、自己の言語の自覚ができることである。

以上の考察から、言葉の「自覚」、「矛盾」を捉えた問題の発見、解決に向かう解釈発見を要点として、言語を活性化する読解「探求」プロセスの全体構造を構築した。深い読解力をもたらす読解「探求」プロセスは、複雑な現象の問題を見だし、「矛盾」を解決して新しいものを創造する実践力を高めるものになる。

課題として明らかになったことは、「探求」を可能にする教師の実践力はどのように築くかということである。読解「探求」を実現する教材解釈力、解釈に基づく授業展開力等、教師の授業実践知の育成をどのように保障するか。事実を正確に捉え、提示した概念から自分の言葉を生成して、核心的な解釈を探求する教師の実践力向上が重大な問題である。子どもの実態を基準にして、そこからどのように一歩前進するか、その時に実行可能な「探求」をいかに工夫して到達していくのかを実践的に解明しなければならない。